

言語感覚をみがき語彙力をのばす研究

——しり取り季語の試み——

藤 田 万喜子

一、はじめに

筆者が岐阜市文芸祭で小・中学生の俳句部門の審査員をした折、残念に思ったことがある。投稿者の作品に、有季定型は守られているものの、季重なりが多かった点である。例えば「夏の夜」とあって「花火」という言葉がある場合、「花火」は俳句の約束として夏の季語だから、「夏」と念を押す必要はない。一句の中に季節を表す言葉は一つ、これをまずは守ってほしいと思っていた。そのためには、もっと季語を知る必要がある、俳句作りに馴れる必要がある。これを、指導者は分かっている、国語の授業で時間をかけることがなく、残念に思っていた。本稿では、季語をよく知り、言語感覚をみがき、語彙をひろげる取り組みとして「しり取り季語」を提案したい。

二、教科書に取り上げられた季語

教科書で季語が取り扱われるようになった。例えば、光村図書の教科書（平成23年検定済）では、六年年に渡り、〈季節の言葉〉のページが設けられ、季語と俳句に触れ合うことができるようになった。これは平成二七年の教科書にも引き継がれている。平成二七年の教科書には、次のような季語が掲載されている。

二年上

・へきせつのことば①「春がいっぱい」かたばみ・よもぎ・さくら・うぐいす・つくし・れんげそう・たんぽぽ・なの花・ひばり・てんとう虫・みつばち・もんしろちよう・すみれ
・へきせつのことば②「夏がいっぱい」せみ・つゆ草・あさがお・えだまめ・なす・すいか・ピーマン・とうもろこし・トマト・かぶと虫・くわがた虫・ひまわり・はたる・びわ

二年下

・へきせつのことば3〕「秋がいっぱい」ききょう・赤とんぼ・かき・コスモス・こおろぎ・ひよどり・すすき・すず虫・いちよう・ねこじゃらし・もみじ・さんま・どんぐり

・へきせつのことば4〕「冬がいっぱい」みのむし・せんりょう・さざんか・つばき・ひいらぎ・はくちょう・ゆず・すいせん・うめの花・まがも・はくさい・ゆき

三年上

・へきせつという言葉1〕「春の楽しみ」花・遠足・花見・夜ざくら・花ふぶき・葉ざくら・さくら月・さくらもち・花ざかり・こいのぼり・ちまき・かしわもち・しょうぶゆ

・へきせつという言葉2〕「夏の楽しみ」七夕・星まつり(七夕まつり)・天の川・おりひめ星(織女)・ひこ星(牽牛)・星うつし・ぼんおどり

三年下

・へきせつという言葉3〕「秋の楽しみ」月見・月夜・月見だんご・中秋の名月・いも名月・十五夜の月・後の月・くり名月・秋の七草・はぎ・くず・すすき・おみなえし・ききょう・ふじばかま・なでしこ

・へきせつという言葉4〕「冬の楽しみ」正月・初日の出・元旦・初ゆ

め・三が日・歌留多・書きぞめ・羽子板・たこあげ・春の七草・せり・なずな・ごきょう・はこべら・ほとけのざ・すすな・すずしろ・節分・豆まき

四年上

・へきせつという言葉1〕「春の風景」山笑う・木の芽・つみ草・ほころぶ・若草・春の野・芽生え・茶つみ・茶畑・茶所・新茶・茶つみ歌・しおひがり・はまぐり・あさり・ひがた・いそ遊び

・へきせつという言葉2〕「夏の風景」山したたる・夏草・夏木立・緑蔭・せみしぐれ・海水浴・すいかわり・波打ちぎわ・日光浴・海開き・夏ざしき・すだれ・ふうりん・よしず・打ち水・夕すずみ

四年下

・へきせつという言葉3〕「秋の風景」山よそおう・色づく・紅葉・黄葉・もみじがり・稲かり・豊作・稲穂・落ち穂・新米・はさ・虫の音・虫の声・虫聞き・虫時雨・馬追虫・松虫・くつわ虫

・へきせつという言葉4〕「冬の風景」山ねむる・落ち葉・雪山・枯れ野・冬芽・冬木立・雪遊び・雪合戦・雪かき・雪下ろし・雪見・雪化粧・雪つぶて・冬ごもり・こたつ・ストーブ・冬眠・冬ごし

五年

・へきせつという言葉1〕「春の空」花冷え・寒のもどり・春がすみ・花ぐもり・春風・風光る・うららかに・のどか・春雨・春時雨・春の長

雨・菜種梅雨

・〈季節の言葉2〉「夏の夜」雲の峰・夏雲・入道雲・夕立・梅雨・入梅・梅雨明け・五月雨・炎天・真夏日・西日・油照り・草いきれ

・〈季節の言葉3〉「秋の夕暮れ」天高く・馬肥ゆる秋・秋晴れ・さわやか・秋風・秋の夜長・望月・十六夜・弓張月・星月夜

・〈季節の言葉4〉「冬の朝」木枯らし・北風・からっ風・寒波・風花・初雪・粉雪・雪模様・氷柱・氷張る・氷点下・霜柱

六年

・〈季節の言葉1〉「春のいぶき」清明・立春・雨水・啓蟄・春分・穀雨

・〈季節の言葉2〉「夏のさかり」大暑・立夏・小満・芒種・夏至・小暑

・〈季節の言葉3〉「秋の深まり」秋分・立秋・処暑・白露・寒露・霜降

・〈季節の言葉4〉「春を待つ冬」大寒・立冬・小雪・大雪・冬至・小寒

取り上げられている季語数は全部で二四七。その内訳は、二学年五二、三学年五五、四学年六九、五学年四七、六学年二四。これらの精選された季語は、身近な事物の季語から広げるように設定され、

また、春の七草、秋の七草、一至二分、二十四節気へと広げられ、

発達段階や伝統文化への配慮を感取することができる。これらと創作との関連をみると、三学年には、マッピングを利用して発想の広げ方を示し、「俳句をたのしもう」の単元が置かれている。季語数が最も多かった四学年では、「短歌・俳句に親しもう（一）」「短歌・俳句に親しもう（二）」の単元が置かれ、五学年では、「言葉をよりすぐって俳句を作ろう 日常を十七音で」の単元で感情語を用いにくいことや創作方法を留意点として挙げ、創作させる設定になっている。これらを踏まえて中学校の学習に繋がっていく仕組みになっている。

以上の点から、俳句の学習がしやすくなったと言える。しかしながら、季語には、指導者の解説を必要とするものもあり、学習者自らの学びを必要としている。

三、実践 しり取り季語

二で、季語に対する学習の配慮がわかったが、新学習指導要領に示されているアクティブ・ラーニングに着目し、季語を楽しく学ぶことのできる方法として、次のような「しり取り季語」の実践を行った。

課題 1 しり取りで出した言葉を歳時記で意味まで調べる。

2 歳時記を利用して、「こんなのも季語だよ」と皆に示すことができるよう意識して、季語でしり取りを続け、意味まで調べる。

ねらい 遊び感覚で行うことを通して、覚えさせられるのではなく、こんな言葉もあったのかという実感に根ざした言語感覚と語彙力を身につける。

仮説 季語に慣れ親しむ活動を設定すれば、俳句に親しみを持ち、創作意欲の向上につながるができる。

方法 ・課題1は、例を真似て、しり取りをした後に、歳時記を使って意味を調べ、写していくという遊び感覚を利用した言語活動である。制限時間は一五分程度にした。

・課題2は、しり取りの言葉を季語に限定した。課題1で慣れたと思われるので、応用として行った。索引を利用し、皆の知らない季語や自分が知らない季語を選ばせた。

・使用した歳時記は『今はじめる人のための俳句歳時記 新版』（角川学芸出版編 角川ソフィア文庫）。

・左図は課題として作成したプリント。

実践対象 実践対象は、教員を目標している大学生（国文学特講Iの受講生）である。

国文学特講I 平成 年 月 日

所属番号 1

氏名 1

●しり取り練習1

例 ①あり 夏、動物、夏の虫、集団で食料を集める働き群をふるまう五、廿いのや良虫の形など。

②かんどう（意匠） 秋、動物、山中に自然に棲息する動物、秋、動物の形など、動物の字を当てた。

③よすらい、露水虫 秋、動物、山中に自然に棲息する動物、秋、動物の形など、動物の字を当てた。

④いなすずの（意匠） 秋、動物、山中に自然に棲息する動物、秋、動物の形など、動物の字を当てた。

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

●しり取り練習2へこの年の歳時記より

四、実践結果

俳句の三要素と言われるが、これは、五七五と言うリズム（定型）、季語を入れるという約束に加えて、文脈を切断し余韻を生み出す切れを入れるという表現技法の三点のことである。俳句創作における

季語の役割は重い。俳句における季語とは、創作上、皆が共有する概念である。共有することで、表現の短さを補う役目を受け持っている。

学習者の作品をみると、季重なりになっていたり、季語の説明になっていたり、共有すべき季語の本情が表現されていたりする。季語を知ること、これらのリスクを避けることができると思える。

課題1の結果を見ると、例の最後である④いなすずめ(稲雀)に続けて、例えば、

A めんぼう ↓ 馬 ↓ 枕 ↓ ラップ

のように、季語を意識せず、しり取りをする者もいた。一方、意識してはいるが、

B 目葉 ↓ りんご ↓ 胡麻 ↓ マラカス

のように、季語でない言葉が混じっている者もいた。

課題2は、「こんなのも季語だよ」と皆に示すことができるよう意識することを強調し、しり取りの初めを自由に設定させた。課題1と2の差は、言葉選びに歳時記を用いるか否かの差である。先のA、Bの学生の記述はそれぞれ次のように変化した。

A パンジー ↓ 事務始め ↓ 女正月 ↓ 梅雨の蝶 ↓ 末枯

B 双六 ↓ くしゃみ ↓ 三日 ↓ カンナ ↓ 菜飯 ↓ 鹿の角切

二人とも課題を意識したことがわかる。

学生にとっては、知っているつもりという言葉を変えて知る活動でもあったが、これらの課題は抵抗のないものであった。

そこで、「教師として俳句を指導する立場」に立って、「しり取り季語」の方法の有効性について、

児童生徒にとって、【主張・結論】。

なぜかという、【】

たとえば、【】

もし、【】

だから、【】

のような文型で学生の意見をたずねた。

五、学生の反応

「しり取り季語」を実施して「楽しかった」と言った学生が多かった。先の文型による記述を見ても、児童生徒にとって、「良い」「有効的」「有効な学習」のほかに、「良い、自分から学ぶことのできる良い経験」「季語に触れる機会となり、楽しく季語を覚えられる」「語彙を楽しみながら増やせるのに効果的」「楽しみながら学ぶことができる」「好奇心をくすぐるもの」などの意見があり、肯定する意見が一〇〇%であった。以下、学生の記述を抜き出しながら考察したい。(傍線は筆者が付した。)

C この方法は児童生徒にとってよいと思います。なぜかというといしりとりという手軽に楽しむことができる方法を使いながら俳句も学ぶことができ、さらに、語彙をふやすこともできるからです。たとえば、自分で歳時記をつかって調べれば、印象に残って覚えやすいし、周辺ページにある語も目に入ると思えます。もし、しりとりを使わなかったら、ただ調べるだけになってしまつて、子どもたちもつまらないと思います。だから、しりとりを入れた季語しらべをおすすめします。

D この方法は児童生徒にとって自分から学ぶことのできる良い経験だと思います。なぜかという点、先生の話を聞くだけよりも、自分で手を動かして学習する方が頭にもより残り、周りの人と協力しながら勉強できるからです。たとえば、先生の方から一方的に教えるだけでは、答えが一つもしくは二つですが、自分達で調べれば多くの答えが導き出すことができます。もし、このような授業形態が増えていけば、これからの必要となつてくる、生きる力の養成にも繋がると思えます。だから生徒達自らが学び合うことのできるこの方法は良いものだと思います。

E この方法は児童生徒にとって季語に触れる機会となり、加えて、楽しく季語を覚えられると思います。なぜかという点、普段あまり季語に触れる機会がありませんが、しりとりでやった

ら、堅苦しくなく、遊び感覚で楽しめると思うからです。たとえば、ただ気になった季語の意味を調べましよう、と指示しても、興味がない子どもたちはすぐに飽きてしまい集中しないと思います。もしこの方法を導入したら、俳句や季語に興味がない子でも楽しみ、少しでも興味を持つようになり、自然と意味を覚えたりするのではないかと思います。だから、この方法は、有意義だと思うし、私自身用いていこうと思います。

F この方法は児童生徒にとって季語に親しみ、俳句を楽しむのにとても良い方法だと思います。なぜかという点、季語を調べること自然と知らない言葉や多くの種類の花の季語を身につけることができると思うからです。たとえば、私もやっているうちに聞いたことのない言葉に興味がいったり、知らない言葉をどんどん調べたいという意欲がわいてきました。もし、たくさん種類の花の季語や言葉を知っていたら、俳句がもっと楽しくなるでしょう。また、俳句だけでなく、生活の中でも、ちょっとした知識が役に立つかもしれないかもしれません。だから、「しりとり季語調べ」は俳句に親しむためにとても良い方法です。

G この方法は児童生徒にとって語彙力を楽しみながら増やせるのに効果的です。なぜかという点、自由に言葉を選ぶことで子どもの好奇心を大切にすることができるようからです。たとえば、

「新鮮」という単語も新聞に書いてあったものを先生に調べると指示されるより、新鮮な魚だね、と大人が言ったのを聞いて疑問を持ち自発的に調べたほうが、楽しく意味も覚えられます。

これらの発言にある「楽しむことができる」、「自分から学ぶ」、「遊感覚で楽しめる」、「やっっているうちに聞いたことのない言葉に興味がいったり、知らない言葉をどんどん調べたいという意欲がわいて」、「子どもの好奇心を大切にすることができる」から、自主的に学べる良さを検証することができる。また、CとGの学生が「語彙をふやすこともできる」と述べている。さらに、Fの「たくさん種類の花の季節や言葉を知っていたら、俳句がもっと楽しくなる」のような発言もあった。この他、「しり取りは児童が好きな遊びの一つであるから、どの子も好きだと想う。それを授業の内容と組み合わせることによって、授業もより楽しいものになる」という記述もあった。理由の記述には、「俳句という難しそうな内容で子ども達が敬遠しそうでも遊び形式で学べば興味が湧いてくるし、調べてみると日常会話で使う言葉も季語で或る場合もあって楽しめる」、「歳時記は一見すると、辞書みたいに文字が多くて読みにくく、調べることも億劫になってしまいが、しり取りにすると、ゲーム感覚で調べ学習をすることができる」があり、俳句は難しいという認識を遊び（ゲーム感覚）を取り入れることで払拭されることが分かっ

た。また、「〈露草〉を調べると、となりに〈蓼の花〉とかいてあり、これなんだろうと気になり（それを調べて）理解ができる」、「今まで俳句を作ったことはあったけど、指定されている季語を用いることや知っている季語（紅葉や桜など）を用いることがほとんどだった。しかし、歳時記を見ることによって知らなかった季語（水玉やレースなど）を知ることができた」という記述からは、紙媒体の良さ（セレンディビティ）を改めて知ることができた。これらから、実践した手立てが有効であったと考えられる。この点で目標及び仮説は達成されたと言える。

一方、次のような意見もあった。

H この方法は児童生徒にとって、進むペースが変わってしまう方法だと思います。なぜかというところ、前半の自分で季語を考えて調べる場合、人によっては四つとも季語であり、「これは季語だったのか」と発見し、やりがいを感じることができない子もいれば、一つも季語ではなく、前半での学びがあまり出来ない子も出てくる方法だと思っただけです。しかし、後半の索引を使って学ぶ方法は自分が興味を持ち、意外だと思っただけの季語を選び、調べることができ、また、しりとりで面白みもあるので、とても良い方法だと思います。だから、私は、前半の方法をやめ、後半の方法を用いるべきだと思います。

I この方法は児童生徒にとって、単に歳時記で季語を調べるよりも頭に入りやすい取り組みだと思います。しかし私は、幅広く季節の語を学ぶには少し改良する必要があるようにも思いました。なぜなら、実際に取り組んでみて、各々の季語を見ると、私のものは、春の季語が入っていませんでした。このことから、一人で歳時記をひくと、選ぶ季語に偏りがでてしまう

可能性があり、幅広く季語を学習するには不十分だと思っただけです。たとえば、しりとり季語調べを一人ではなく四〜六人のグループの中でやってみたりなど、もっと大人数で取り組むと幅広く学ぶことができるのではないのでしょうか。今回の授業でも、季語の有無を問わず行ったしりとりでも大人数で行った方が「芽吹く」「クローラー」のように、多様な語が挙がっていました。もし、大人数で行ったとしても季語に偏りがでるのであれば、「時候の季語でしりとりをする」など、ルールに縛りを設定したり、男女比を均等にしたグループで子ども達が楽しんで学ぶことができる方法だと実感しました。だから、幅広い知識を得ることができるよりよい取り組みにしていくためにも、大人数で行うなどの工夫を施すのが良いと思います。

Hの学生が言う前半、後半は、課題1、課題2のことであろう。四で例に取り上げたAのような者がいるので、課題2のみの方が良

いと言うのであろう。面白みという点では、Hの言う通りかも知れない。しかしながら、筆者は、歳時記で調べ、季語ではなかったとすることも学びだと考える。

Iの学生が指摘している「一人ではなく」「グループ」「など、もっと大人数で取り組むと幅広く学ぶことができる」や「時候の季語でしりとりをする」など、ルールに縛りを設定」は、量と質をねらって季語を学ばせる方法である。指導者が季語を示して教えるときは、春・夏・秋・冬・新年の季節や時候・天文・地理・生活・植物・動物などのバランスに配慮することが出来る。このことに配慮した意見と考えられる。グループ活動については、「グループで交流させてたくさんの言葉に触れる機会を作ってあげたい」、「最初にしり取りをしてから一緒に調べたりして交流を深めることもできる」、「得意でない子がいたとしても友達と楽しみながら協力してできるのでスムーズに進むはずだ」という記述もあり、言語活動の場を広げる提言もあった。

六、結び まとめと提案

本稿では、教えるのではなく、遊び感覚で自らが調べるという体験を通して言語感覚をみがき語彙力を伸ばす方法として、「しり取り季語」を提案した。

学習指導要領に触れると、平成二九年に小・中学校新学習指導要領が告示された。言語感覚については、小学校では「養う」としているのを中学校では「豊かにする」とし、より高いものを求めている。語彙については、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力の重要な要素と捉え、語感を磨き語彙を豊かにすることを求めている。自分の語彙を量と質の両面で高める、言い換えれば、理解語彙と使用語彙の充実が求められている。今回の提案はこれらに焦点を当てたものである。語彙を豊かにし、言語感覚を養う基盤として、小学校第一学年及び第二学年に「イ長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと」とある。^(注1)これは、言葉そのものもつ豊かさに気付くことを重視して新設された指導事項である。この言葉遊びの中に「しり取り」が例示されている。

歳時記に触れると、今回、利用した歳時記は『今はじめる人のための俳句歳時記』であった。この学習方法を小・中学生に行うなら、『読んでわかる俳句 日本の歳時記』(宇多喜代子ほか編 小学館)や『現代子ども俳句歳時記』(金子兜太編 チクマ秀版社)などのような子供向け(初心者向け)の歳時記を利用する方がより親しみが湧くであろう。或いは、電子辞書を利用するのも良いであろう。個人で歳時記が持てない場合は、グループで歳時記を用意し「しり

取り季語」をすると良いであろう。個人で行う場合とは違った楽しさが味わえる。

季語の意味について、学生には三文を目処に(一文は二〇字程度)まとめさせるのが適当と思われるが、児童生徒には丁寧な文字で写すようにと指示するのも良いであろう。

季語には、①自然発生的にできたもの(自然物)や②約束や③古典などから引用されたものがある。①は、雪や氷や桜などの四季の景物。②の約束によってできた季語とは、月は秋、香水は夏、日永は春、夜長は秋という類。③の古典に由来する季語には、例えば、山笑う、山滴る、山粧う、山眠るや亀鳴くがある。前者は「臥遊録」から、後者の亀鳴くは為家の「河越しのみちの長路の夕闇に何ぞと聞けば亀ぞなくなる」から来ている。^(注2)季語を知り、創作する機会が継続的に設けられることが伝統的文化の理解や継承にもつながるに違いない。

(注1)「小学校学習指導要領解説 国語編」平29年6月

(注2)俳誌「あすか」俳句の方法 星利生 平20年2月号